

本校学生の英語意識調査

宮奥正道* 吉留文男*

Research on Our Students' Consciousness and Attitude Toward English and English Learning

Masamichi MIYAOKU Fumio YOSHIDOME

Abstract

English teaching has been dramatically changed after the introduction of ALT (Assistant Language Teacher) and oral communication lessons at high schools in 1990s. We would like to reveal what feelings, motivation, consciousness, and attitude toward English and English learning our college students have. We analyzed answers of questionnaires on English and English learning which freshmen of this college answered at the beginning of the school year in 2002 and 2005. We compare questionnaires of our college students and those of other high schools all around Japan that were conducted in 1988. The result shows some characteristic tendencies on the above-mentioned respects, compared with the pilot research in 1988. We would also like to propose some ideas to motivate students to learn English.

Key words: attitude, consciousness, English learning, motivation

はじめに

英語の学習者（高校生）が日頃どのような意識を持って英語の学習をしているかについては、「英語学習についての調査」が過去3回にわたってなされている。過去に実施された最後の全国規模の調査から17年が経過している。その間に日本を取り巻く教育環境は変化し、英語教育界ではオーラルコミュニケーションの導入に見られるように、指導要領の改訂に伴い、カリキュラムや英語の時間数が変化した⁽¹⁾。また、中学や高校の教育現場に英語指導主事助手（ALT）という形でネイティブスピーカーが配置されるなど、英語教育環境は大きく変貌を遂げてきた。このような変化を受けて、その後、学習者の意識がどのように変化したのかを、本校の学生を対象にして調査分析することにした。

I 研究の目的

近年、本校に入学してくる学生の英語力の低下については、入学直後に実施する学力試験や中間・期末などの定期試験などの結果から指摘されてきた。しかし、本校生は英語や英語学習に対して日頃どのような意識を持っているのかについては、今まで把握できていなかった。本校生の英語の学力を伸ばしていくためには、本校生の英語や英語学習に対する意識を明らかにし、その結果に基づいて、英語の学習の動機付けをはかりながら、今後英語の授業を改善していく必要があると思われる。そのため、アンケート調査を実施した。

II アンケート調査方法

本校は商船学科、電子機械工学科、情報工学科の3学科からなる5年制の高等専門学校である。この調査は2002年と2005年の4月に新入生を対象にして、「英語学習についての調査」を実施した。調査項目に関しては広島大学が過去に実施した調査項目（1988年）と同じ内容でアンケート調査を行った⁽²⁾。

III 問Aに関する調査

1. 目的

現在、本校学生が英語学習に対してどのような態度をもち、英語学習の必要性を感じているかを、先行研究（1988年）、1回目（2002年）、2回目（2005年）の調査を比較検討し、その変化、特徴を明らかにすることが目的である。

2. 結果

5「強く賛成」、4「賛成」、3「どちらとも言えない」、2「反対」、1「強く反対」という五段階の評価で表現し回答させた。各項目に対して、英語および英語学習に好意的に反応したもの、非好意的に反応したもの、どちらとも言えないと反応したものを「好意群」、「非好意群」、「中間群」とし、先行研究との整合性を一致させた。

「社会に出てから自分が英語を用いることは必ずあると思うから、英語を勉強しておく必要がある。」のように英語学習に好意的な内容の項目では、「強く賛成」と「賛成」をあわせて「好意群」とし、一方、「われわれは母語（母国語）を持っているので、英語など勉強する必要がない。」というような英語学習に非好意的な内容の項目（A4, A6, A7, A9, A10, A11, A13, A16）は、「反対」と「強く反対」と回答したものをあわせて「好意群」とした。以下の図1では、非好意群（非）、中間群（中）、好意群（好）として表す。

Table 1 1988年度、2002年度と2005年度入学生との比較

			2005年度 入学生	2002年度入学生	先行研究(1988 年度の調査)
問 A					
1	これからはせめて簡単な英語 くらいは教養として知ってお く必要がある。	非	0.0	1.6	2.9
		中	6.3	10.5	15.4
		好	93.7	86.3	81.7
		その他	0.0	1.6	
2	社会に出てから自分が英語を 用いることは必ずあると思う から、英語を勉強しておく必要 がある。	非	0.8	4.0	4.3
		中	20.6	16.9	33.8
		好	78.6	77.4	61.8
		その他	0.0	1.6	
3	私が英語を勉強しているのは、 単に大学入試または、就職試験 のためだけではない。	非	8.7	4.0	7.0
		中	31.7	44.4	46.6
		好	58.7	50.0	46.4
		その他	0.8	1.6	
4	外国語の書物はほとんど翻訳 (日本語訳)で読めるから、英 語を勉強する必要はない。	好	55.6	52.4	52.7
		中	35.7	41.9	39.5
		非	8.7	4.0	7.8
		その他	0.0	1.6	
5	これからは国際社会において おおいに活躍できるように、英 語をマスターしておかなけれ ばならない。	非	7.9	3.2	6.6
		中	34.9	29.8	31.9
		好	55.6	65.3	61.4
		その他	1.6	1.6	

6	英語は数ある教科のひとつにすぎないので、大して重要とは思えない。	好	57.1	59.7	51.2
		中	28.6	32.3	36.0
		非	14.3	5.6	12.8
		その他	0.0	2.4	
7	これからは英語以外の外国語が広く用いられるようになるかもしれないから、英語は勉強しなくてもよい。	好	72.2	66.1	63.2
		中	24.6	28.2	32.2
		非	3.2	4.0	4.7
		その他	0.0	1.6	
8	英語を用いる職業がだんだんふえてくるから、英語を勉強する必要がある。	非	2.4	5.6	5.3
		中	15.9	23.4	27.9
		好	81.7	69.4	66.7
		その他	0.0	1.6	
9	日本の文化水準を考えれば、英語の勉強は不要である。	好	65.1	62.1	62.8
		中	29.4	30.6	29.6
		非	5.6	5.6	7.6
		その他	0.0	1.6	
10	私は大学入試または、就職試験に合格するためだけに英語を勉強する。	好	57.9	55.6	49.0
		中	34.9	35.5	39.5
		非	6.3	7.3	11.5
		その他	0.8	1.6	
11	英語を知らなくても、日常生活に困らないから英語を勉強する必要はない。	好	50.0	50.0	47.9
		中	38.9	39.5	37.9
		非	11.1	8.1	14.2
		その他	0.0	2.4	
12	英語は論理的な言葉なので、頭の訓練をするのに必要である。	非	11.1	8.1	16.2
		中	69.0	62.9	65.9
		好	19.0	27.4	17.8
		その他	0.8	1.6	
13	英語は将来必要であると思う人だけが勉強すればいい。	好	23.8	41.1	30.7
		中	50.8	33.1	43.1
		非	25.4	24.2	26.2
		その他	0.0	1.6	

14	英語は世界共通語のように使われているのだから、勉強しておく必要がある。	非	3.2	4.8	5.3
		中	16.7	22.6	24.1
		好	80.2	71.0	70.6
		その他	0.0	1.6	
15	母語（母国語）に対する感覚を するどくするために、外国語の 一つである英語を勉強すべき である。	非	6.3	6.5	10.1
		中	63.5	47.6	54.1
		好	30.2	44.4	35.8
		その他	0.0	1.6	
16	われわれは母語（母国語）を持 っているの、英語など勉強す る必要はない。	好	63.5	66.9	60.2
		中	31.0	25.8	30.3
		非	5.6	5.6	9.5
		その他	0.0	1.6	
17	国際理解、国際親善のために英 語を勉強すべきである。	非	4.0	3.2	7.3
		中	33.3	29.8	36.5
		好	62.7	64.5	56.2
		その他	0.0	2.4	

3. 結果分析と考察

[A] 2005 年度の場合

全項目に関して、「好意群」について70%以上に属しているものが、A1, A2, A7, A8, A14で、50%以上に属しているものは、A3, A4, A5, A6, A9, A10, A11, A16であった。結果として、全17項目中14項目が50%以上に属していることになる。また、残り3項目でも「非好意群」が50%を超えることはなかった。このことは、本校学生は英語学習に対して好意的な意識を持っているといえる。以下それぞれの項目について具体的に考察する。

「入学・就職」に関する項目 A3, A10 では両項目とも好意的な反応が高く、本校学生は「試験のための英語」を否定的に見ているように思われる。

「教養的価値」に関する項目の中で、好意的反応が特に低いものとして A12, A13, A15 が挙げられる。しかし、これらの項目では、それぞれ「中間群」に対する反応がいずれも50%を超えているのが特徴である。

「国際理解・実用的価値」に関する項目では極めて好意的であるように思われる。A2, A7, A8, A14の項目はいずれも好意的な反応は70%を超えて、残りの A4, A5, A11, A17の項目についても、いずれも50%を超えている。

[B] 1988 年度、2002 年度との比較

今回の調査（2005年）と先行研究（1988年）、2002年の「好意群」の数値を比較すると、この17年間のうちに英語学習に対する意識が大きく変化しているといえる。「好意群」の数値が50%を超えた項目は、1988年度が12項目、2002年度が14項目、今回が14項目と増加している。さらに、「好意群」の数値が70%を超えたものは、1988年度は2項目、2002年度は3項目、今回は5項目と増加している。

次に個々の項目に注目してみると、いくつかの項目において顕著な変化を示しているものがある。「好意群」の増加が際立ったものとして、項目 A2 の「好意群」の数値が1988年度は61.8%であったものが、2002年度は77.4%、今回は78.6%とは約17%と上昇している。項目 A7 においては項目 A2 ほどの変化ではないが1988年度は63.2%、2002年度は66.1%、今回は72.2%と少しずつ増加の傾向を示している。さらに、項目 A8 は過去の1988年度と2002年度の数値と比べ、今回の「好意群」の数値が12%から15%と増加している。これらの項目 A2, A7, A8 はいずれも「国際理解・実用的価値」の範疇に入るものであり、社会環境の変化

とグローバル化の影響と考えられる。

さらに、「好意群」の数値が50%を超えた項目で注目すべき点がある。項目A3では1988年度は46.4%、2002年度は50.0%、今回は58.7%の数値として上昇し続けている。同様に、項目A10においては、1988年度は49.0%、2002年度は55.6%、今回は57.9%とわずかではあるが増加している。この二つの項目は「入学・就職試験」の範疇に入るものであり、「試験のための英語学習」という限られた目的から実用的な価値へと変化の傾向を示している。

一方、「好意群」の数値が減少したものもある。今回の調査と1988年度の結果から「好意群」の数値が下がった項目はA5, A13, A15であった。項目A5「これからは国際社会において大いに活躍できるように、英語をマスターしておかなければならない。」では、1988年度は61.4%が2002年度は65.3%、今回は55.6%と変化している。この数値は一見「国際理解・実用的価値」の増加傾向と矛盾するようであるが、項目B6「英語を勉強して外国へ行って見たいと思う」という回答（好意群の数値の減少）とも関連があるように思われる。項目A13「英語は将来必要だと思う人だけが勉強すればよい。」に対する「好意群」は1988年度の数値から約7%と減少しているが、今回の調査で中間群「どちらとも言えない」と回答した数値が約50%を示している。同様に、項目A15に対する反応も1988年度の数値から約5%と減少しているが、今回の調査では「中間群」が63.2%という数値を示している。

[C] 考察

問Aの調査結果で判明してきたことは、英語学習に対する「好意群」が年代と共に増加していることである。特に、好意群に関して70%を超えるものが、今回5項目に増加していたことは興味深い。この項目に共通する内容は国際理解と実用的価値を志向する調査項目である。グローバル化の用語が1980年代後半、日本の政治家や知識人のキーワードであった「国際化」という意味に同化された社会環境にも一因があるように思われる。このような社会的な環境の変化、グローバル化、が1988年度の傾向と今回の特徴に影響を与えていると考えられる⁽³⁾。一方、教育現場においても、ALTの量的拡大が、この傾向を促進させてきた一因ともいえる。全国で招聘された英語指導主事助手の数は、1980年には35名、1986年には235名、2001年には6190名のALTが活躍している⁽⁴⁾。このような英語を母語とするALTの英語教育に与えた影響も大きいとみられる。さらに、項目A3「入学・就職試験」に対する本校学生の反応も注目すべき点の1つであろう。その理由として、5年制の技術者養成を目的とした高等専門学校では、一般的な高等学校が目的としている入学試験との関連性が低いように思われる。その反面、将来技術者として、語学の実用的な技能の必要性を感じていることをこの調査結果は示した。項目A8の数値は明らかに本校学生の意識を反映していると思われる。今後、学習者のニーズの分析と教育内容との関係を再検討する余地がある。

更なる問題は、今回明らかになった英語学習に対する「好意群」の増加と現実の状況とが必ずしも一致していない点であろう。一般的に、ある教科に対しての「好意群」が多いほど、増加するほど、その教科（英語学習）への取り組みは肯定的であり、積極的な振る舞いが期待される。しかし、現実はその逆であり、この問題は問B、問Cに対する意識結果と関連させながら議論を深めるなければならないが、その中のひとつとして、英語学習に対して「楽しさ」、「面白さ」に本校学生は非好意的な反応を示した。言い換えるならば、英語学習についてその必要性は感じているが、「楽しさ」、「面白さ」を感じていないという回答に、本校学生の潜在的な英語・英語学習に対する意識が顕著に表れていると思われる。

IV 問Bに関する調査

1. 目的

問Bの目的は先行研究と同じく、現在の本校生の英語学習における技能、ムード（雰囲気）、気力の3つの分野について調査し、先行研究ならびに、2002年度入学生、2005年度入学生を比較してみることである。

4技能に関する質問はB8, B11, B12, B14の質問で、ムード（雰囲気）に関する質問はB2, B3, B5, B7, B9、気力に関する質問はB1, B4, B10, B13, B15である。

2. 調査結果

5「はっきりとそう思う」4「大体そうだと思う」3「どちらとも言えない」2「そうだとは思わない」1「決してそうだとは思わない」という五段階の評価で表現し回答させた。それぞれの項目に対して5と4を選んだもの、3を選んだもの、2と1を選んだものと3段階に分けて、1988年度の先行研究と整合性を一致させた。

問Aのまとめと同じように、各項目に関して、英語および英語学習に対して好意的に反応してものを「好

意群」、非好意的に反応した者を「非好意群」どちらともいえないと反応した者を「中間群」とする。

ただし、B1の「英語をみただけでゾットする」とB5「英語を使うのはなんとなくきざっぽい感じがする」
B7「英語ができれば英語ができない人に対して優越感を覚える。」B9の「英語は勉強したくないが、仕方が
ないと思っている」は質問内容から考えて、5、4を「非好意群」、1、2を「好意群」として述べる。

Table 2 1988年度、2002年度と2005年度入学生との比較

問B		2005年度 入学生	2002年度 入学生	先行研究 (1988年度 の調査)	
1	英語が上手になってもあまり意味はないと思う。	1と2	72.2	71.8	73.6
		3	16.7	21.8	15.2
		4と5	11.1	4.8	11.2
		その他	0.0	1.6	
2	西洋人や英語をみただけでゾットとする。	1と2	44.4	50.0	73.0
		3	31.0	28.2	18.2
		4と5	24.6	20.2	8.8
		その他	0.0	1.6	
3	英語ができるのはなんとなくカッコいいと思う。	1と2	12.7	7.3	14.5
		3	27.0	21.0	23.0
		4と5	60.3	70.2	62.4
		その他	0.0	1.6	
4	是非とも英語ができるようになりたい。	1と2	6.3	1.6	9.3
		3	10.3	10.5	15.8
		4と5	83.3	86.3	75.0
		その他	0.0	1.6	
5	英語を使うのはなんとなくきざっぽい感じがする	1と2	48.4	52.4	50.0
		3	39.7	38.7	33.3
		4と5	11.9	7.3	16.8
		その他	0.0	1.6	
6	英語を勉強して外国へ行ってみようと思う。	1と2	16.7	12.9	11.5
		3	25.4	23.4	16.9
		4と5	57.9	62.1	71.6
		その他	0.0	1.6	
7	英語ができれば英語ができない人に対して優越感をおぼえる。	1と2	41.3	47.6	44.3
		3	40.5	34.7	35.8
		4と5	18.3	16.1	19.8
		その他	0.0	1.6	
8	英語が自由に話せたらよいと思う。	1と2	2.4	4.0	4.2
		3	8.7	5.6	7.0
		4と5	88.1	88.7	88.6
		その他	0.8	1.6	

9	英語は勉強したくないが、仕方がないと思っている。	1と2	32.5	41.1	39.9
		3	35.7	29.8	31.9
		4と5	31.7	27.4	28.4
		その他	0.0	1.6	
10	アメリカ映画などをみて、字幕に頼らないでわかるようになりたい。	1と2	22.2	16.9	12.2
		3	21.4	14.5	17.7
		4と5	54.8	66.9	70.1
		その他	1.6	1.6	
11	英文が辞書なしで読めるようになりたい。	1と2	10.3	8.9	8.3
		3	22.2	12.9	14.4
		4と5	67.5	76.6	77.2
		その他	0.0	1.6	
12	どうせ英語をすこしばかり勉強してもできるようにならないと思う。	1と2	34.1	41.9	33.5
		3	41.3	35.5	33.3
		4と5	24.6	21.0	33.2
		その他	0.0	1.6	
13	英語で手紙などが書ければすばらしいと思う。	1と2	17.5	10.5	11.1
		3	30.2	21.0	19.0
		4と5	52.4	66.0	69.9
		その他	0.0	2.4	
14	英語を勉強しなくてもすむ社会になればいいと思う。	1と2	41.3	37.9	33.2
		3	38.1	33.9	38.6
		4と5	20.6	26.6	28.2
		その他	0.0	1.6	

3. 結果分析と考察

[A] 2005年度入学生の場合

全14項目について、好意群が70%以上に達しているのはB4、B8の2項目で、50%以上ではB3、B6、B11、B13の4項目である。このことから、本校生徒は英語学習に対して好意的な意識を持っているといえる。

[B] 1988年度、2002年度との比較

1988年度の全国調査と比べて、特徴的なものを述べてみる。

B2の「英語をみただけでぞっとする」という項目は、1988年度全国調査の「西洋人や英語をみただけでぞっとする」という質問とは少し異なっているので、単純には比較できない。4と5と答えた「非好意群」は1988年度全国調査では8.6%、1と2と答えた「好意群」が73.0%であるのに対して、本校は4と5と答えた「非好意群」が2002年度入学生が20.2%、2005年入学生が24.6%、1と2と答えた「好意群」は2002年度入学生が50.0%、2005年度入学生が44.4%となっている。つまり、本校では英語に対して拒否反応を示す値が1988年全国調査よりも大幅に大きく、さらに2002年度入学生よりも、2005年度入学生が増えている。つまり英語嫌いの本校生が2002年よりも増加し、2005年度では24.6%まで増加している。

B6の「英語を勉強して外国へ行ってみよう」という項目は1988年の全国規模の調査では4と5を答えた「好意群」は71.6%いるのに対して、本校では2002年度入学生が62.1%、2005年度入学生が57.6%となっている、このことは外国に対するあこがれが1988年度全国調査に比べると低く、2005年度入学生は2002年度入学生よりも少し低くなっている。

B10の「アメリカ映画などをみて、字幕に頼らないでわかるようになりたい」という項目では、1988年年度全国規模の調査では4と5と答えた「好意群」は71.6%となっているのに対して、本校では2002年度入学生は66.6%、2005年度入学生は54.8%となっている。2005年度入学生は1988年全国調査より16.8%も低く、2002年度入学生よりも11.8%も低くなっている。つまり英語に対する興味関はあるものの、英語学習の結果に対する希望や期待が低くなっていることを示している。

[C] 考察

2005年度入学生で、英語や英語学習に対して「好意群」に該当する項目が70%を超える項目2つ、50%を超える項目が4つある。このことは本校生は英語や英語学習について興味や関心があることを示している。しかし1988年度の全国調査と比べてみると、B6やB10のように英語学習に対して意欲をもったり、英語学習の成果として期待できるようなことがらに対して数値は低く、本校の学生はやや冷めた反応をしている。1990年代以降、ALTの中学・高校への配置やオーラルコミュニケーションの導入などで、日本の英語教育をとりまく環境は大きく変化した。その結果、英語を実際に使用できるような環境は、以前に比べるとずいぶん整ってきたにも関わらず、少なくとも本校の学生に関して言えば、英語学習に対してやや冷めた反応をしているのが特徴である。

V 問Cに関する調査

1. 目的

問Cの目的は、英語学習に関してC1「興味の有無」、C2「楽しさ」、C3「おもしろさ」、C4「好き嫌い」の4項目について調査したものである。

2. 結果

問いに関して次のように回答をさせた。

問1の質問に対して、5「非常に興味がある」、4「興味がある」、3「よくわからない」、2「興味がない」、1「全く興味がない」

問2は5「非常に楽しい」、4「楽しい」、3「どちらでもない」、2「楽しくない」、1「全然楽しくない」

問3は5「非常におもしろい」、4「おもしろい」、3「どちらでもない」、2「おもしろくない」、1「全然面白くない」

問4は5「大好きだ」、4「好きだ」、3「どちらでもない」、2「きらいだ」、1「大きらいだ」

問1～4まで、5と4を選択した者を「好意群」、1と2を選択した者を「非好意群」、3を選択した者を「中間群」、とした。

英語学習(学校での授業、家庭学習などすべてを含む)に対するあなたの感じをありのままに、それぞれ①から⑤の中から一つ選んで、回答用紙に記入しなさい。

問C

1

Table 3 1988年度、2002年度と2005年度入学生との比較

英語学習に	2005年度 入学生	2002年度 入学生	先行研究(1988年度の調査)	
⑤ 非常に興味がある	非	18.3	10.5	19.4
④ 興味がある	中	35.7	30.6	31.9
③ よく分からない	好	45.2	57.3	48.7
② 興味がない	その他	0.8	1.6	

① 全く興味がない

2 英語学習は

⑤ 非常に楽しい	非	29.4	24.2	36.1
④ 楽しい	中	46.0	41.1	43.2
③ どちらでもない	好	23.8	33.1	20.7
② 楽しくない	その他	0.8	1.6	
① 全然楽しくない				

3 英語学習は

- ⑤ 非常におもしろい
- ④ おもしろい
- ③ どちらでもない
- ② おもしろくない
- ① 全然面白くない

非	25.4	17.7	35.8
中	50.8	50.0	41.9
好	23.0	30.6	22.2
その他	0.8	1.6	

4 英語学習は

- ⑤大好きだ
- ④ 好きだ
- ③ どちらでもない
- ② きらいだ
- ① 大きらいだ

非	32.5	24.2	35.4
中	44.4	34.7	33.9
好	22.2	39.5	30.6
その他	0.8	1.6	

3. 結果分析と考察

[A] 2005 年度入学生の場合

C1 から C4 まで 5 と 4 の「好意群」を選んだ項目が 50% を超えるものはない。好意群が 1 番多かったのは C2 で 45.2% が最高である。このことから、英語学習に関しては「興味」はあるものの、「楽しさ」「おもしろさ」「好き」の項目はいずれも好意群が高くない。

[B] 1988 年度、2002 年度との比較

C1 の「興味の有無」に関して、全国調査で 4・5 の「好意群」を選んだのは 48.7% であるのに対して、本校の 2002 年度入学生では 57.7% と全国平均より 10% も多いが、2005 年度入学生では 45.2% と 3.5% も低くなっている。つまり本校入学生は 3 年の間に英語学習に対して興味のある学生が 12.2% も減少している。一方、1・2 の興味がないと答えた学生は、本校では 2002 年度入学生が 10.5% であったが、2005 年度入学生では 18.3% と 7.8% 増加している。

C2 の「楽しさ」に関して、全国調査では 4・5 の「好意群」を選んだのは 20.7% であるのに対し、本校の 2002 年度入学生では 33.1%、2005 年度入学生では 23.8% となっている。1988 年度の前項調査よりは多いものの、9.3% も減少している。一方、1・2 の「非好意群」を選択した学生は 2002 年度入学生が 24.2% であるのに対して、2005 年度入学生では 29.4 と 5% 増加している。

C3 の「おもしろさ」に関しては、全国調査では 4・5 の「好意群」を選んだのは 22.2% であるのに対して、本校 2002 年度入学生では 30.5%、2005 年度入学生では 23.0% となっている。つまり 7.5% 英語の授業が面白いと感じる学生が減少している。一方、1・2 の「非好意群」を選んだ学生は 2002 年度では 17.7% であるのに対し、25.4% となっていて、7.7% 増加している。

C4 の「好き嫌い」に関しては、全国調査では 4・5 の好意群を選んだのは 30.6% であるのに対して、本校 2002 年度入学生では 39.5%、2005 年度入学生では 22.2% となっている。つまり英語学習が好きな学生は 3 年間に 17.3% も減少している。一方、1・2 の「非好意群」を選んだ学生は 2002 年度入学生では 24.2% であるのに対し、2005 年度入学生では 32.5% と 8.3% 増加している。

以上のことから本校の学生は英語学習に対して、1 「興味の有無」 2 「楽しさ」 3 「おもしろさ」 4 「好き嫌い」 の 4 項目のいずれもこの 3 年間に好意群が 7% 程度減少していることが指摘できる。

以上の結果から本校生は英語を学習することに関して、「楽しさ」「おもしろさ」「好き」の項目の数値が低くなっていることを示している。

[C] 考察

「英語の学習」そのものについては「興味」はあるものの、「楽しさ」「おもしろさ」「好き」といったことに関しては数値がずいぶん減少している。このことから実際の英語の授業について、そのあり方を検討する必要があると思われる。しかし、学習で努力を必要とすることが伴うと、数値が減少することは、本校生がもっと「分かってもらう」努力も必要であると思われる。

VI まとめ

今回の調査結果から、本校学生は英語学習に好意的であるものの、「楽しさ」「面白さ」「好き」という点では非好意的な傾向が明らかになった。このことは英語学習について、その必要性を感じているが、さほど学習して楽しさや面白さを感じてはいないことを意味している。この相反する回答に、本校学生の気持ちがあらわれていることは前述した。つまり、この結果は本校生が感じている必要性の程度を反映していると読み取ることが可能であろう。端的な例をあげれば、大学入試を受ける受験生は受験科目を必死で学習する。このことは切迫した必要性を学生が実感しているからである。しかし、本校学生はこのような具体的な必要性を切実なニーズとして実感していないように思われる。今後、英語学習の必要性を学生にどのような手立てで意識化させ、本校生自らが学んでいける学習の方略を示すかの指導が課題である。

さらに、問 B の調査結果でも明らかのように、英語や英語学習については依然として興味や関心はあるものの、長期間にわたり努力が必要されるようなことに関して、あまり執着せず距離をおいた態度を取っている。このことは ALT の中学・高校への配置やバイリンガルの放送など、自分たちの身の回りで英語と接する機会が増えたために、ネイティブの英語に対して物珍しさが無くなったことが一因として考えられる。そのため、ネイティブの英語を求めて映画を見たり、まして外国まで行こうとするあこがれから来る意欲の減退につながったと思われる。

本校生は英語や英語の学習に関しては、努力を伴うような実際の英語の学習に関してはやや冷めた反応している。実社会で求められる英語の学力をつけていくためには、長年にわたる日々の努力が不可欠である。したがって、本校生の英語学習に対する態度や意識を改善するためには、本校生の英語学習について動機付けを高める必要がある。そのためには海外での語学研修のプログラムを学校をあげて実施したり、外国でのインターンシップを実施したり、第一線で活躍している卒業生による講演をしたり企画して、本校生に刺激を与えるべきである。

参考文献

- (1) 文部省 (1990) 『高等学校学習指導要領解説』東京：教育出版株式会社
- (2) 三浦省吾、松浦仲和、今井裕之、水野康一、池辺裕司 (1990) 「高校生の英語学習意識」『英語教育』Vol.39 No.7 pp.53-70 東京：大修館
- (3) 佐藤学他 (1998) 『国際化時代の教育』(Vol. 11) 東京：岩波書店.
- (4) 和田稔 (1987) 『国際化時代における英語教育—Mombusho English Fellows の足跡』京都：山口書店